慈光

第十卷　第一號

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和三十三年一月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第一〇六号）

目次

信仰或問……近角常観…(2)
親鸞聖人と私……池山栄吉…(5)
聖人一流章……花田正夫…(7)
大経結びの段……福島政雄…(11)
―大平和の世界へ―

嗚呼教行信證
眞宗
信心建立何
為我狂奔
歎異一篇傳後世
思想信仰如是倫

上掲の詩は、近角常観先生の、昭和七年の中元の日に書かれたものであります。先生は昭和六年の十一月卅日に突然脳溢血でたほれられ、それから静養八ヶ月の七月に、初めて入浴せられて、その日右手右足の不自由な御身で誌されたものであります。

当時、京都に居られた池山先生が、近角先生の御病気もやうやく恢復に向ひ、遠方からの見舞客にだけは僅かながら面会されるまでになられたと聞かれ、早速御慰問なさいました。その後、私が池山先生を蓮華谷の御宅にお訪ひしますと、次の様に語られました。

『今度近角君の見舞に行つて来たよ。実は会ふまでは、あの元気な近角君が、動けない大病とあつては、どうしてゐるのかと、たまらない気持であつた。所が、病室に入ると喜色を満面に湛へて、よう来てくれたと云つて、不自由な右手を左手で支へながら、先づ握手してくれと云ふ注文だつた。それからやつと椅子に落ち着くと、自分は信界建現々々と口に筆に叫んで来たが、教行信証さへあれば真宗は不滅である。又歎異鈔さへ後世にのこれば、如何に思想が険悪になるやうなことがあつても、必ずそこに解決の光を与へられることを確信する……と。恰も今親にあつて身も心も温められつや〳〵してゐるといつた、何とも言へぬ麗容であつた……』

年頭この先生の確信を仰ぎ、徳音に浴しませう。

信仰或問

近角常観

或問、

信仰なるものは熟々考ふるに二種類に過ぎざるが如し。一は、隠遁的に人生を退きて、如何なることがありても、これに甘んじて、これに任せて安心すること。一は、進撃的に飽くまで奮闘して、如何なる場合にも打ち勝ちて進まんとすること、この二種のいづれかを選ぶものに非ざるかいかん。

○

如何にも信仰の人生に活現する有様としては、消極、積極の両面あるものなり。然れども、真実の信仰なれば、消極も決して隠遁逃避の意味にあらずして、信仰上安んずべき所ありて動かぬのである。積極も奮闘努力の意味に非ずして、信仰上、所信の曲ぐ可らざるものあるゆへに、如何なる障害をも排しても進むべき力を生ずるのである。しかしこれは真実の信仰の上にあらはるる消極積極である。

若し真実の信仰にあらずして仮設的の信仰ならば、隠遁的進撃的の二者いづれかに傾き易きものである。

全体人間の性質が冥想的か、実行的かの二者いづれかに属するものである。これ即ち定散の二機である。冥想的、主観的な信仰は即ち定機にして、あきらめ主義、隠遁主義に陥り易いのである。実行的、理想的な信仰は即ち散機にして努力主義、奮闘主義に陥り易いのである。

○

冥想的な信仰は真実の信仰ではない。自分の頭で作りて居るのである。主観的に仮設して居るのである。仏様を有難いと心に思うて居るのである。

度々言ふことであるが、或人が西有穆山師を訪うて、自己の見解を呈した。曰く『天地宇宙は我と一体であると思うて居ります』と言へば、禅師は言下に『思うて居るだけわるい』と答へられた。

他力の信仰にも思うて居るのが多い。如来様は助けて下さると思うて居るものが多い。思うてゐるのは苦しいことがあれば、砕けてしまふのである。思ふと思はぬの穿鑿ではない、如来様は真に助けて下さるのである。彼人は親切な人であると思うて居るのと、真実親切な人であるのとは大なる相違である。その親切に初めて感じ、その御助けを受けたのが真実の信心である。

一度如来様の恵みを感じたならば、苦しければ苦しいだけ、益々かはらざる如来の真実が有難い。たとへば、画ける星ならば、日の暮るると共に暗澹として、その光を失ふも、真に天に輝く星ならば、世が冥くなればなる程、益々光輝を発するのである。思うてゐる信仰なれば隠遁退嬰に陥るなれど、真の恵を頂きたるものなれば、世が当てにならぬほど仏の真実がありがたい。あきらめるのではない、恵みによりて生き返るのである。かくて嘗て冥想的たりし信仰がひるがへりて真実の信仰に入りたのである。所謂定散共に廻して宝国に入るのである。

○

定機に於いて云ふことは、亦散機に於いても云ふことが出来る。自分の頭で理想を作りて、これを標準として飽くまで実行せんと企てるのが散善である。廃悪修善をせんと奮闘するのである。

しかれども、理想は益々高くなるものなるゆへに、益々実行出来ぬ様になる、努力主義は遂に倒るべき運命を有するのである。ここに益々自己の罪悪深重なること、煩悩具足なることを見出すのである。

しかるに仏かねてしろしめして煩悩具足の凡夫と仰せられた。そこで初めてこの煩悩具足の我を見捨てたまはぬ親心に接したのである。理想が折れて頭を下げて、親の御慈悲に摂取されたのである。そこで努力主義をひるがへして真実の信順となつたのである。かくて一度所信が立つた以上は決して曲ぐることも出来ず、退くことも出来ず、そこで所信を確守することが出来るのである。

○

仏が助けて下さると思うて安心して居るのも、自分の思ひである。仏が有難いと思はんと試みて、思へぬ〳〵と歎くのも矢張自分の思ひをたのみにするのである。

たとへば人ありて、直々親に遇うて伝言を承り親の真心を話しに来てくれたとき、これに答へて曰く。我は左様に思うて居る、かねてより其通り考へて居るといふ返事をしたらば如何。必ずやわざ〳〵これを言ひに来てくれた人は言ふであろう。それは汝の思ひにあらずや、想像にあらずや、仮定にあらずや。我は親に遇うて而も汝に真心を伝へて呉れとの依頼をうけてかく親の真実をお知らせするに、

既によく承知して居るやうな態度を示さるるならば、我がわざ〳〵来れる所詮なしと、斯く告げられて初めて真の親の真心をいただきて申訳なかりしと自覚するであろう。これ主観的信仰をひるがへして真実の信仰に入りたる有様である。

又一人あり、同じく親より直接の伝言報知をききながら、いや我はその様に思ひたいと、日夜つとめつつあるのである。せめて朝夕なりとも汝の知らして呉れる様に親を思ひ出したいと努力しつつあるのである。されどもその様に思へぬので困ると答へたら如何。前者の如く、折角の報知を既に分つてゐる様に思うも不可なれど、現に親の真心を伝へつつあるのに、思へぬ、分らぬ、とばかり言うて、自分が親を思へぬことを苦にするも困りたものである。その時、必ず、其人は言ふであろう、我は汝にかく思へといふのではない、汝は思へぬであろう、分からぬであろう。それ故我は面り目撃した儘を伝へ親の真心を直々言うて聞かして居る。しかるにいたづらにかく思ひたい、思はねばならぬと努力奮闘して居るのは大なる間違ではないかと諭された時、翻然心をひるがへして、嗚呼、今までは親を思はう、仏を思はうと努力しつつ、仏の私をかくまで思うて下さる御慈悲を知らなかつたと、忽ち親の真心をいただいたならば、これ努力主義の信仰をひるがへして真実の信仰に入る有様である。

善導大師の二河白道の譬喩の如きは、直々如来の方より招換したまふ有様をたとへられたのである。

汝、一心正念直来、我能護汝、
衆不畏堕水火二河。

は、如来の直々の仰せである。而も一僧指授の教、西方弥陀の直説である。

和讃に曰く。善導大師証を請ひ、定散二心ひるがへし、貧瞋二河の譬喩を説き、弘願の信心守護せしむ。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

正信偈に曰く。五濁悪時群生海応信如来如実言といひ、道俗時衆共同心、唯可信斯高僧説と、いづれも直接信心の上より出でたる弥陀の直説である、伝言である。信ずる外に別の仔細なきなりである。

未完

『求道』第九巻 第六号。

親鸞聖人と私（一）

池山栄吉

外界のまゝになる、ならないはさておいて、自分で自分の心をどうすることも出来ないとは、この時つくづくおもひしられた。

自分の腑甲斐なさに思ひ到ると同時に、これまで私が生涯の目的として、たえず追及して来た名誉といふものが問題となつて、結局自分は、残念ながら、到底名誉を背負ふ資格がない……その主体となるべき自分が無力だから……とあきらめなければならなくなつた。

目的のなくなつた人生！何たる味気ないものだらう。

名誉などと、そんな浮いた話をしてゐる場合でない。今現に、かう悪い心がむくくと起つて来て、それを押へつけようとする良心が、ピシ〳〵はねかへされる始末では、私の究極の運命は、この世からなる永劫の地獄の外にない

私は絶望と恐怖そのものであつた。

人なき空曠のはるかなるところに、悪徒、猛獣、毒虫に追ひつめられた二河白道の旅人は私であつた。

あゝかういふ時に、本当の信仰があつたならと、強烈な真信の願求に、息ははずみ、胸ははちきれんばかりになつた。迷子になつた幼子が、あわただしく母を尋ねるやうに、いらだつた心は、今度こそ真の仏を見つけようと、くるほしいまでにあせつた。

すると……真暗闇のなかに一点の光の浮び出たやうに……不図胸に浮かんだのが、

『親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまゐらすべしと、よき人のおほせをかうむりて信ずほるかに別の子細なきなり』

の御文であつた。

二河白道を前にみて、進退谷まつた旅人の耳にはいつた、東岸発遣の声がそれであつた。

私の眼はこの文に見入つた。

私の耳はこの文に聞き入つた。

私の心はこの文に凝つた。

その刹那、焼石が水を吸ひ込むやうに、心の奥までこの文が浸み透つた。西岸招換の声が聞えたのであろう。私の心にある衝動を感じて、ハッと我に返つた。信仰の門をひらく手懸が見つかつたのだ。

私は、親鸞とあるのを私と読んで、よき人とあるのを親鸞聖人と読んだ。そしてその文を口の中でくり返したかと思つた途端……ドッと念仏が口を衝いて出た。滝のみなぎり落ちるやうな勢で、しかもかつて覚えのないやすらかさをもつて。

今迄心を占めてゐたやるせないさびしさはいつしか消えて、何ともいへないたのもしさが心の底から湧き上るのを覚えた。これが他力の真境だな！と、はじめて知つた時の心地！。広大難思の慶心とはこれを言つたものか、体験の上から推知される。

かうして直接親鸞聖人の御手引によつて、大悲選択の願心にひきあはされ、たゞ念仏の心のおこると共に、心光照護の境に置かれた。これは私の四十二のときであつた、

『平生のとき善知識のことばのしたに、帰命の一念を発得せばそのときをもつて娑婆の終り、臨終とおもふべし』

私は世にいふ厄年に「前念命終」を体験して、それから今日まで「後念即生」の日暮しをして来たうちに、不思議の一つに教へられるのは、以前口に出にくかつた念仏がやすくと称へられることと、仏の存在……体験後にあつては、特に阿弥陀仏の存在……が、もう問題に上らなくなつたことで、これが白道を踏んで疑怯退心を生じない、他力の金剛心……有漏の穢身に宿る……といふものかと、われながらそぞろに勿体なく思ふときがある。

十方微塵世界の念仏の　衆生をみそなはし
摂取して捨てざれば　阿弥陀と名づけたてまつる。

濁悪の群萌を悲引したまふ如来、私達に間に合ふ唯一の御名。どうして南無阿弥陀仏と称へずに居られよう！

闇より光へ

かなしきはあくなき利己の一念を
もてあましたる男にありけり　　啄木

あの時の私の気分は丁度そんなものだつた。

従来、若存若亡のたよりない状態にあつた仏の幻影は、無論このときも消えてゐて、仏とは人間の妄想が造り出した概念に過ぎない、と思ひきめなければならなかつた。

日頃出にくかつた念仏が、てんで出て来ないばかりか、何方に向つて遁路をもとめたものか、その見当さへもつかなかつた。

聖人一流章

花田正夫

聖人一流の御勧化の趣は信心をもて本とせられ候。

そのゆゑは、もろ〳〵の雑業をなげすてて一心に弥陀に帰命すれば、不可思議の願力として仏のかたより往生は治定せしめたまふ。その位を、一念発起、入正定之聚、とも釈し、そのうへの称名念仏は、如来わが往生を定めたまひし御恩報尽の念仏とこころふべきなり。あなかしこ〳〵。

この御文は、蓮如上人の六十一歳頃、吉崎の御生活の末頃の御作と伝へられ、八十通の御文の中でも、一番簡明に、真宗の要義をギリ〳〵に詮じて、単刀直入にお勧め下さつたものであります。

吉崎と申せば「年来狐狼のすみか」であつた山中を切りひらいて一宇を建立され、数年の歳月を、野山に猪を狩り、海河に魚を捕り、あきなひをする、さう云ふ野人を相手に法雨を注がれたところであります。又仏縁を得ながら秘事法文に堕するともがらを、その陥井から救ひ上げられるなど、言語に絶する御苦労の末、やうやく信火行燈のたちそめる地と転じたのであります。

さてそれについて、仏教信仰の現在から申せば「田舎が都会で、都会が田舎」、報恩講一つにしても、草深い田舎ではおごそかに村人達がこぞつて集り、念仏讃歎申してゐるのにひきくらべ、繁華な都会ほど、さびれて行き、形骸化されて居ります。それもそのはづ、都会をあこがれて集る我々は、日夜に、名利の猪を狩り、愛欲の魚を追ふ、文化人と呼ばれる野蕃人であり、そこに中興上人の吉崎での御苦労は只今ではこの都会といふ山中、海河にすむ我々のためと深く感じるのであります。

忙しい〳〵と自己の煩悩の奴隷になつて追ひまくられて、仏法から逃げ廻る身故に、簡明、直截に、ひきよせてかなめを御勧め下さる上人の御親切が、この愚鈍な野人故にと一入身にしみるものがあります。

『聖人一流の御勧化のおもむきは』

満九十歳を貫ぬく、親鸞聖人の御勧めの趣旨であります。それは阿弥陀仏の本願に源を発し、釈迦出世の本意と現れ、三国七祖の上に伝へられ、証しせられたそのままを『親鸞一人がためなりけり』と信順せられて、口に筆に、私共にお勧め下さるそのかなめであります。

さて、ここに『聖人一流の……』と何げなく書き初められる上人の心に、『親鸞めづらしき法をひろめず……』の祖聖の御心とおのづと一味なものを拝するのであります

『信心をもて本とせられ候』

信心とはまことのこころであります。凡夫相対の自力信でなく、全く仏心であります。それに眼を開けさせて頂くと申しますか、仏の生きたおまことが徹すると申しますか、そうした絶対他力の大信心が、根本であり、先決問題であるとの仰せであります。

只今でこそ「信心を本とす」と、誰も彼もわかりきつたことと聞き流して居りますが、聖人の御著書、教行信証、愚禿抄、入出二門偈、和讃、等々を拝読して、ここ一つ、とつきとめ、それ一つで充分といふところに達するには大変なことであります。

物の本末、事の先後といふものは、われよしとする独善者には見出せませぬ。惟ふに、上人が京の黒木を燃して聖教をひもとかれ、或は月明りに書見を続けられ、白衣は古び汚れて鼠色であつたと伝へられます。さうした歳月を送られるにつけて、み法の光に照されて『末代の凡夫、罪業のわれら』とも『わが身は悪しきいたづらもの』とも信知せられ、そこに絶対無二の弥陀仏の悲願を仰がれたことでありませう。

そこに、聖人一流の御勧化の趣が、信心一つにきはまることを、全身心をあげてうなづかれて、この一句が流れ出たのであります。

『そのゆゑは、もろ〳〵の雑業をなげすてて、一心に弥

陀に帰命すれば』

『そのゆゑは、』とは説明ではありません「その信心とは」との意味で、手短かにさしよせて、分り易く火の玉となつてお導き下さる上人に説明など無用であります。

『雑行をなげすてて一心に弥陀に帰命すれば』とは『六度万行の道はあつても、凡愚底下の身には、そのいづれの行も及び難きことを仏かねてしろしめされて、その浮ぶ瀬のない者を弥陀仏がおたすけ下さるぞ』と、釈尊を初めとした東岸のよき人々の長時不断のお勧めをうけて、一心に弥陀に帰命すると共に、雑行がすたるのであります。

『不可思議の願力として仏のかたより往生は治定せしめたまふ』

ここは、何ともかともこれ以上に申せないところであります。仏智を頂いて自然に知らされる外はありません。これに相当するものは『正信偈』の

『弥陀仏の本願を憶念すれば自然にその時必定に入る』

であります。弥陀の本願を信ずる心がおこる、その刹那に、願力の自然として、この身は娑婆にありながら、往生の心配のない身にさして頂くのであります。

『その位を、一念発起、入正定之聚とも釈し。』

信楽のひらける一念に、正しく浄土に生れるに定つた仲間に入れさせて下さると、曇鸞大師がお説きになり。竜樹大士は、必定の菩薩と同じ徳を頂くとも説かれました。

『そのうへの称名は、如来わが往生を定めたまひし、御恩報尽の念仏とこころうべきなり』

この一句は、特に当時流行の鎮西流の「たすけ給へ南無阿弥陀仏」の自力念仏に対して水際立つて上人が「称名は報恩であるぞ」とお示し下さつたのであります。然しその根本は、願成就文の『信心歓喜乃至一念』。即ち諸仏の開導を蒙つて名号のいはれをききひらき、やれうれしやの一念に、南無阿弥陀仏〳〵と自然に称名申すのでありますが、その念仏は御恩報尽の念仏で、おたすけにあづかつたことの御恩を生涯かけてよろこぶ念仏であると、上人が懇ろにお知らせ下さつてゐるのであります。

さて、ここで私は初め、御恩報謝の念仏と申せば、有難や、尊やの心で申す念仏でなければ駄目と思ひ、さう云ふ念仏は私には仲々出来ないところから、ここが邪魔になつて困つたのであります。ところが『御一代聞書』にもありますやうに

『心より尊く有難く存ずるをば仏恩と思ひ、ただ念仏の申され候をばそれほどに思はざること、大きなる誤なり。自ら念仏の申され候こそ、仏智の御催し仏恩の称名なれ』

『信のうへは、尊く思ひて申す念仏も、またふと申す念仏も、仏恩にそなはるなり。……聖人の御流は弥陀たのむが念仏なり。その上の称名はなにともあれ、仏恩になるものなり、……』

『南殿にてある人怪我に蜂を殺し候ひしに、思ひよらず念仏申され候。その時、何と思うて念仏をば申したる、と仰せられ候へば、ただかはいやと存じふと申し候、と申されければ、仰せられ候。信のうへは、何ともあれ、念仏申すは報謝の義と存ずべし。みな仏恩になる。……』

と繰り返されて、信の上は、自然に申す念仏も、尊く思うて申す念仏も、或は蜂を殺した刹那にふと申す念仏も、いづれも〳〵仏恩の称名であると、仰せられてゐます。

このことは実に有難い仰せであります。八万四千の煩悩具足の身が、八万四千の縁にふれて、そこに出て来る心は千変万化であります。それが有難や尊やの心で申す念仏でなければ御恩報謝にならぬといふのであれば、さうした道は私には閉ざされた道であります。毎日、砂を嚙むと申しますが、臘を嚙むと申しますが、味もすつぽもない念仏が殆んどであります。然し、この称へる私の心に全く用事のない、『その上の称名はなにともあれ仏恩になるもの なり』とは、何といふ有難い御教化でありませうか。

そこのところを『このうへの称名……御恩報尽の念仏とこころうべきなり』と、特に仰せ下さるのであります。有難や、尊やの念仏ばかりであれば、御恩報尽の念仏とこころふべきなりのお言葉は不用であります。恥づかしい、お粗末な心でしか念仏申されぬ私共に、それも仏恩になるぞ、とねんごろにお知らせ下さつたのであります。

大経結びの段

——大平和の世界へ——

福島政雄

それからそのあとでありますが、十四の仏国からこの無量寿仏のお浄土に何十億何億といふ衆生がズーと往生して行くといふ事を細かにお述べになつてありますが、これは十方世界如何なる国如何なる世界のものも結局はこの仏の浄土に往生するのである、世界の国々は、殊に地球上の国々はお互に喧嘩腰になつてひどい事をやり合はうとしてゐるのであるけれども、その中の一切衆生、これから生れて来るところのあらゆる人々も皆最後にはこの大平和大光明の世界に落ち付くのである。しかもそのまゝのその地球上に於いて、その生活に於いて、その心を必ず開かれるのであるぞ、末来永劫かけて開かれのるであるぞ、今命を受けてゐる者は今、未来に命を受けてゐる者は未来に、必ずこの心を開かれ、それが世界平和の本であるぞ、といふ様に仰言つてゐるのであると私には受け取れますのであります。

さういふ事がありましてから、いよ〳〵これから先は最後のところで、釈尊が「よく法を聞け、この法を何時迄も止めておく」と仰言るとところであります。これからがこの御経の流通分と云はれるところでありまして、今度は又弥勒菩薩に対して仰言るのであります。

「仏の名号を聞いて歓喜踊躍して一度でも仏のみ名を称へるとその人は非常な大利を得る」とかう仰言てゐます。大利を得、かういふお言葉を聞きますと、私共たゞ今の頭は汚れて居りますから、何か大きな利益を得るといふ様に聞えますけれども、さうぢやないのであります。つまり非常に何とも云へないお蔭を蒙る、心の上のお蔭であります。そして「無上の功徳を具足する」と。何とも云へない功徳を具へると云ふ事になると、かう仰言つたのであります。

何時も私共聞かされますところの、「設ひ大火が三千大

千世界に充満して居ても、それを通り過ぎてこの教法を聞け、そしてこの教法を聞いて歓喜信楽して受持・読誦してその説かれた如くに修行せよ、」と。この三千大千世界に充ち満ちてゐる火の中を通つてでも、これは非常に強い御言葉でありまして私共が励ましを受ける御言葉であります。実際、求道の心持といふものはさういふ風の事でなければならぬと思ひますのであります。これは火の中を通つてと、どんなにひどい火傷をしてでも、どんなに恐ろしい中を通つてでも、まことの道を頂くみ法を聞くといふことが一番であると。かういふ事でありませうか。たゞ私共にそれだけの心の覚悟が何時でも出来てゐるのか、それが問題であります。私なんかの事は何時も申し上げます様に、もと〳〵求道心なんかありやしなかつたのであります。殊に大無量寿経にお説きになる様な求道心といふ様なものは無かつたのであります。それこそ黄金の鎖で自分を繋いでゐると云ふ様な事ばかりして居りました。そして自分自身の修養といふ事に満足してゐるやうな心持でありましたのが思ひもよらず転じてまゐりましたのであります。決してこんな三千大千世界に満ち〳〵てゐる火の中を通つてゞもとそんな心持を持つてゐたのでないのでありますが、それが心を開かれ始めましてから何十年といふもの歩ませて頂いてゐるそこを振り返つて見ますと、やつぱりそこにはどんな事があつても、どんなものに出会つても、自分の中心の心持が他に移る事はないと、そこだけは慥になつてゐると思ふのであります。私なんかはそれはキリスト教の本も読めばキリスト教の偉い人の事もしらべて見たり、それから他の本をしらべてみたりし続けてゐるのでありますが、それならば、それだから今度キリスト教になつたり孔子のお弟子になつたりしてるかと申しますと、さうぢやないのでありまして、それはキリスト教の方でも有り難い事を感じるのでありますし、孔子の教も有り難い所を感じますのでありますが、何時も申します様に、それは私の心の姿を知らされる心の鏡としてさういう教に接してゐる、孔子の教の道を自分が履み行つてやつて行けると思へませんし、又キリストの教に従つて行ける人間だとも思ひません。やつぱり私の様な奴はこの釈尊のお示しになつてゐるこれへ行くより他はない。行くと云ふよりもこゝに落ちて来てゐるのであると、かう言ふのであります。かうして釈尊の仰言つて居りますそんな勇ましい姿とはとても云はれませんけれども、やつぱりどう云ふ事があつてもこの道を聞き開いて行くより他は無いと、そこだけははつきりなつてゐるのであります。さうでありますからして、やはりかう云ふ励ましのお言葉を聞きますと非常に有り難いのであります。自分がさういふ勇ましい歩み方をして来て居るとは思

ひませんけれども、非常な有り難い励ましをして頂いてゐる、かう云ふ感じを持ちますのであります。

そしてこの経を聞いて行くと無上道に於いて退転せずと仰言つて居りますから、無上道、仏の道に於いてあとしざりする事がないと。それだから心を専らにしてこれを信ぜよ、これを受けよ、そしてこの教へに従つて行く様にとおつしやつて下さつてゐますが、実際それは有り難いお言葉であります。

それからその次に私の心にとまります所は、「これから先の世の中で経道滅尽、御経の教の道も皆滅してなくなつてしまふといふ時が来るだらうが、さういふ時にでも自分は慈悲を以てその有様を憐んで特別にこの経、この大無量寿経をとゞめて止住すること百歳せん、百年の間この大無量寿経を人間の世の中に止めておくであらう。」と。経道滅尽といふのでありますからこの御経に説かれてあるまことの道、かういふものもなくなつてしまふ、かう云ふ時が来る、そんなお言葉を聞きますと今日の日本なら日本の社会がやつぱりそんなものであらうと感じますのであります。経道滅尽であります。仏教といふものはどこにあるのか、細々となつてしまつて何処にあるかわからんと云ふ様な一般の人々の様子を見て居りますと、もう仏教などは問題にされない、皆さんもそう感じておいでになるでありませうが、殊に今の青年達に仏教なんかは私が二十歳頃に軽蔑してゐたそれ以上に仏教なんかを問題にしてゐないやうであります。そして世間は争ひの世間である、たゞの争ひでなくてこのごろの争ひは新聞やラヂオで聞いてをりますと、始終子供が親を殺したとか、妻が夫を殺した、或は夫が妻を殺した、子供でも殺したとか、そんな事が始終起つてゐる、これはたしかに経道滅尽といふ世の中であります。

そこに釈尊はさういふ経道滅尽するさういふ所に慈悲を以て哀愍し、さういふ有様であるから一層哀れに思ふと云ふ心持から特別にこの大無量寿経の教といふものを止めて、百年の間止めて置かうと仰言るところのその百年といふものは、これは私共が一二三四と数へるところの百年ではないだらうと思ふのでありまして、それは講釈をなさる方がこんな事を仰言つて居られますが、これは百といふ数は満数、満ち足りた数の意味になつて、止住すること百歳せんといふのは、この世の年月と云ふものが満ち足りるといふ時迄、それだから永遠にといふかわりに百歳と仰言つてゐる、かう受けるのが本当でありませう。それだから経道滅尽といふ様なひどい世の中になればなる程、慈悲を以て憐んでこの御経の教を何時迄も〳〵止めておくのであると、さうでありますからこの大無量寿の教といふものは、

私共のこの世の中が駄目になれば駄目になる程、尚一層切実に頂かれる教である、かういふわけであります。それはまあ非常に有り難い所でありまして、駄目になる程尚一層頂ける、これは社会全体についても、国家全体、地球全体の国々についてもさうでありますが、私なら私一人についてもさうであります。やつぱり私なら私といふ人間が経道滅尽の有様である、といふ事を始終感ずるのであります。青年時代にはこれでもまだ〳〵純なところがあつたけれども、併しこの年になつてみると不純なところばかりで、自分自身の心も体も経道滅尽といふ有様であるといふ事は、私やつぱり自分の上に感じますのであります。併しさういふ事を我が身の上に感じますにつけても、この経を止めて百年、何時々々迄もこの経を止めておくぞと仰言るところの釈尊のお心持が私に届くとかういふ事になりますのであります。

さうでありますから一寸余談の様になりますが、私が若い時からよく考へました事でありますが、もし私が島流しになります時に、書物は三つしか持つて行く事を許されないとしたら何と何を持つて行くでせうといふ事をよく考へたものであります。さうすると日本の昔の本では万葉集を持つて行き度いと考へたのであります。それぢや仏教の方では何か、たつた一つと、さあかうなりますと親鸞聖人の歎異抄か大無量寿経かとなりますけれども、歎異抄は大分心の中に滲み込んでゐますから書物を持つて行かんでもよいであらう、さうすると大無量寿経は私は読んでゐても知れたものでありまして、お聞き頂いた通りに所々飛び〳〵に自分の心持を申し上げたのでありまして、本当にこの大無量寿経をしんから何処迄も読むといふ事は、私にはまだ出来て居ないのが本当でありますから、仏教の本にたゞ一つとなりますと法華経か大無量寿経かとなつてまゐります。法華経もいゝんだけれどやつぱり私の身にとつては大無量寿経といふ事になりますでせう、かういふ事になりますのであります。西洋の本で何か持つて行くか、これも問題でありますけれども、東洋のものではさういう事であります。それに支那の本を一つ数へますならば孔子の事を書いた論語、あれを撰び度いとかういふ事を考へて居ります。さうでありますから大無量寿経といふのはまだ〳〵私の命が何時迄ありますかわかりませんけれども、命のある限りは、も少し繰り返して私自身の上に味はせて頂き度いと思つて居りますから、特に「この経を止めて止住せん事百歳せん」といふ釈尊の御言葉が私に響いてまゐりますのであります。

未　完

編集後記

新春を謹みて賀し奉ります。

○

さて昨秋から毎号に近角先生の求道誌からの原稿を頂き私共の指標とさせて頂いて居りますことは、本当に有難いことであます。

又今回は信友加田岡俊雄さん（名古屋保護観察所勤務）の年来の御芳志から、池山先生の「親鸞聖人と私」の原稿の誌された小冊子を頂き、年頭に掲げさせて頂きました。

○

△大経結びの段も、次回で完了いたします。長い間の先生の御講話を謝しまつります。今度は、かつて先生が聞かれました臼杵祖山先生述の観無量寿経講話筆録の第一回分の原稿をすでに頂いて居ります。引き続き臼杵先生の世に稀な信味を頂けますことは、本年のこの上ない喜びであります。

昨年十一月末には、仏教の女性観と韋提希夫人の救済の御講話を当会館でお願ひ出来、目下テープレコードから写して居りこれも、やがて発表させて頂けませう。

△聖人一流章は、教へられるまゝ感ずるまゝを誌し、皆様の御叱声を乞ふ次第であります。

先日の中外日報に、木山十彰師が沢柳政太郎先生の逸話をのせて居られました。それは

……あの先生の例の応接間で……

『時に木山君』と呼びかけられて『お釈迦様は今の学者達のいふやうな、むづかしいことは言はれなかつたのではなかね、この頃つく〴〵僕はそれを云つて居るが』

と云はれた、とあつた。

中興蓮如上人の、わかり易く、手短かに、かなめ〳〵を、ずばり〳〵と仰せられる。然しそれを愚夫愚婦への教と云ふやうに、自分は一角文化人の仲間入りをしてゐるかの如く思ひ、身をそらしてゐる人々、それの代表者が全く私自身でありますが、上人の鋭い、物の急所を突かれる御教化は、かけがへのない至言であり、実語であり、如来の教勅であります。私自身冷汗を全身にあびる思ひで御文や御一代聞書を拝して居ります。然しこれはおくればせ乍ら私には有難いことであります。

聚墨生

御案内

毎月第一、第二、第三日曜、午后一時半。講話。

一道会館。市電、新郎通一丁目下車。

○

毎月廿四日、午前・午后、法話会。

市内昭和区小桜町教西寺。妥花学園東。

市電御器所通り下車。

定価　一部　十七円（送共）
　　半年　百円（送共）
　　一年　三百円（送共）

名古屋市南区駅上町二ノ二八
編集・発行人　花田正夫
名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷人　本田政雄
名古屋市南区駅上町二ノ二八
発行所　慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番

慈光　第十卷第一号　昭和三十三年一月十五日発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可